

教師は  
何を指導し、  
どう動いたのか？

3 指導計画の共有

教師同士のチームワークを確立する

熊本県立  
宇土高校

宇土高校の取り組み

教科指導の意思統一を図る

力量や経験の違いによる  
教科指導の差をなくすために、  
教科団が同じ教材を同じ歩調、同じ厳しさを  
指導できるように教師同士の意思統一を図る。  
国数英は常に教科会が開けるように、  
職員室の机の配置を工夫した。

# 学年団や教科団、 保護者を巻き込んで 生徒を指導

1 学年主任が担任をサポート  
学習・進路指導用の資料・統計の  
作成及び分析、保護者向けに  
月1回の「学年通信」の発行

2 特に指導が必要な生徒への対応などは  
学年主任が担当。クラス担任が効率的にクラスの  
運営に取り組めるよう配慮した。

3 マクロ的なデータを頻繁に提示  
生徒の現状についてあらゆる項目を調査し  
分析結果をその都度教師が共有した。  
家庭学習時間調査、個人別模試成績推移調査  
マク模試の誤答調査など、それぞれの調査項目を  
様々な角度から分析し、グラフ化して  
学習指導・進路指導に活用した。

熊本県立  
宇土高校

大正9年創立。県西部に位置し、1学年普通科9クラスで  
「質実剛健」を校訓に掲げ、89年度入試では  
熊本大をはじめとする国公立大に163名の  
現役合格者を輩出した。また、1年次は全員いずれかの  
部活動に所属。文武両道を旨とする。ホクシング部、  
陸上部、ソフト部、書道部が特に活躍している。



’96年 4月、新1年  
生を引き連れ

た2泊3日の阿蘇宿泊オ  
リエンテーション。その  
初日、学年主任の講話が  
始まることになっていた。

「いよいよだな」と川  
口一敏先生は、大きく深  
呼吸した。学年主任という責任ある立場になっ  
て初めての大きな行事がこのオリエンテーショ  
ン。生徒に気合いを入れるのももちろん、この  
学年他の教師たちと3年間の団結を心に誓う  
大事な講話になると川口先生は自覚していた。  
何事も最初が肝心だ。これから話す1時間の間  
に伝えることはただ一つ。

「宇土高校は教師も生徒も鍛えられる高校  
学年全体で団結して3年間を通してがんばろう」  
3年間の高校生活、気を抜いているとあっ  
という間に過ぎてしまふ。行き当たりばったりで  
何となく時を過ごすのではなく、3年間を通し  
て目標を持ってがんばらなければならない。そ  
れは生徒にはもちろん、3年間同じ生徒を受け  
持つことになるであろう各クラス担任へのメッ  
セージ、さらには自分への誓いでもあった。  
「3年間を通してがんばる」。それを口にする  
のは簡単だが、実践するのは容易なことではな  
い。何よりクラス担任をはじめ、学年を運営す  
る教師全員に、その考えを持って3年間、系統  
立った授業、系統立った進路指導を行ってもら  
わなければならないのだ。



だが、オリエンテーションの講話でいくらか  
えても、具体的な実践がないと学年はまとまら  
ない。川口先生はまず、自分の担当教科である  
英語科に目を向けた。  
1年生の 英語科を担当する教師は4  
名、自分よりも皆若く、うち  
1人は新任、1人は他校から赴任してきたばか  
りで宇土高校をよく知らなかった。  
宇土高校は「質実剛健」を校訓と  
しており県内でも「あの高校へ行  
くと教師も生徒も鍛えられる」と  
いうイメージがある。ならば、そ  
のイメージを利用しない手はない。  
川口先生は、英語科の教師にかね

3 年間を系統立てて生徒を指  
導するには教師の足並みを  
そろえなければならない。職員室  
の机の配置の見直しなど、教師間  
のコミュニケーションがまず重視  
された。



宇土高校進路指導主任  
川口一敏 Kawaguchi Kazutoshi

昭和24年熊本県生まれ。  
英語科担当。同校は赴任12年目。  
学年主任を務めた後、今年から  
進路指導主任に。生徒も教師も  
褒められれば伸びる。が信条。

てから温めていたいろいろな構想を語った。

「今まで、宇土高校は数学でリードしてきた  
学校です。私は『宇土高校の英語』と呼ばれる  
ような、本校ならではの英語の授業を作りたい。  
そのために、皆さんにご協力をお願いしたいん  
です」

生徒は「先生は厳しい」とか「先生  
は優しい」といったことに敏感になりがちだ。  
そして、それは教科を問わず、生徒に対する動  
き掛けに悪影響を及ぼしてしまつことがある。  
まず英語科で、4人が同じ教材を同じ歩調、同  
じ厳しさで教えることを徹底し、「宇土高校の英  
語」というものを作り上げる。川口先生はそう  
して宇土高校の英語力を向上させたかったのだ。  
そんなプランを聞きながら、英語科の教師の  
1人、佐竹正憲先生は疑問に思った。前任校で  
も少なからず「あの先生に習いたい」「あの先生  
の授業は分かりやすい」といった声が生徒から  
聞こえてきていた。経験も個性も異なる教師が  
同じ質の授業なんて本当にできるものなのだろ  
うか。

「でも、そんな心配は無用でした。とにかく  
川口先生はアイデアが豊富で、しかもそのア  
イディアを実行する行動力がずば抜けていたん

教師は、何を目標として動いたのか？

です。教材作りなど、面倒なことは率先してやってくたさる。私たちは安心して就いていくことができました」

まず、3年間を通して徹底的に語彙力を付けさせるようにした。そのための方法として、定期考査で単語の配点を100点中30点、実力考査で200点中50点にし、やらざるを得ない状況を作る。単語帳は既製の物を買わずに教科書の単語をすべて覚えさせる。そして、語彙に關心を持たせるために年2回の単語一斉コンテストを実施する。

さらに1年次には文法力、2年次には構文力そして3年次には読解力を身に付けさせるという重点目標を設定。「覚える項目」と「理解する項目」を区別し、覚えなければならぬ項目については徹底的に覚えさせるために様々な工夫をする。例えば定期考査ごとに間違えた問題についてはなぜ間違えたのか、正しい答えはどのようにして正しいのか、理由を明らかにさせる。「間違いないノート」を生徒に提出させた。また、新1年生に対しては、特に4月中は毎時間10分程度を使って予習状況を点検し、予習のやり方や高校英語の学習方法をこの時期に徹底させるようにした。

こうして1年次の終わり頃には英語科の取り組みの成果が実り出した。学年全体の英語力が上昇し、模試の成績も大きくアップしたのである。

### この頃は

英語科全体のがんばりが、よい意味で他の教師にとって刺激になったのだろうか、他の教科でも学年団としてのチームワークが密になってきた。

4月当初から川口先生の発案で、1学年の職員室の机の配置を常にその場で教科会が開けるように教科担当者ごとに隣接させたのだが、その効果もあつたのかも知れない。机が近いと気軽に他の教師と教科についての情報交換ができる。自分が会話に加わっていないなくても、他の教師の情報が耳に入ってくる。それが川口先生のねらいだった。

「さらに、週1回学年会を開き、その週にすべきことを細かいことまで文書にして学年全体で確認し、若手でも新任者でも全体の動きを見通して指導に当たれるようになりました。また、折に触れて生徒の現状把握に役立つような資料を作り、学年団で進路指導の方向性を意思統一しました」

分自身も中学生と高校生の子を持つ親として、川口先生は情報を公開すること、そして教師のがんばりを見せることの大切さを痛感していたと言った。

教師集団が自らの実績で指導に自信を深めていったように、保護者の信頼も生徒の学習態度を実際に改善していくことで勝ち得ることができた。保護者の信頼が増すに従って、家庭学習の習慣付けや遅刻させない、サボらせないなど、学校の目が届かない所での指導は積極的に引き受けてくれる保護者が増えていったのだ。学年団と保護者という車の両輪がしっかりしていれば、それに乗っている生徒たちは真つすすむ進めるのだ。

例えば、1年9組は4月以来、毎週月曜日にクラスでミニ新聞を発行し続けて年度末には通算35号の新聞を出した。1年1組はなんとクラス41名全員が1年間無欠席という偉業を達成した。これらは一見、成績とは何の関係もないことのように思われるが、「継続は力なり」ということを身を持って知ったこれらのクラスは、成績も抜群だったと言つた。正に生徒と教師、そして保護者との連携がこつしたクラスを育てたのだ。川口先生は「学年通信」を通じて彼ら生徒に、そして担任に惜しみない賞賛の言葉を贈つた。

### その後

川口先生たちが指導した学年は、'99年度の大学入試において大きく躍進した。国公立大合格者実績で見ると、'98年度が現役生113名だったのに対し、'99年度

生徒の現状を把握するため、模試の結果分析、家庭学習時間調査など、詳細にデータをまとめ、毎週1回の学年会で指導の方向性を検討した。



資料をまとめた分厚いファイルは、正に努力の結晶だ。模擬試験の結果分析、マーク模試の誤答調査、個人別模試成績推移グラフ、家庭学習時間の調査……。例えば、何か大きな学校行事があつたとき、その数日前から家庭学習時間は極端に減る。それは成績上位者も下位者も共通の傾向だ。しかし、その行事が終わるとすぐに成績上位者はいつもの学習時間に戻るのに対し、下位者はなかなか戻れない。そういった分

は現役生163名が合格という好成绩を修めたのである。

これは1年次から3年後のことを視野に入れた取り組みの成果に他ならない。その取り組みの根幹になったのは学年団や教科団のチームワークと、保護者の協力は。

現在、進路指導主事として3つの学年すべてに目を配る立場になった川口先生は、自分たちの取り組みが宇土高校の新たな伝統として着実に引き継がれていくことを祈っている。学年の運営、進路指導にはやはり大きなエネルギーを使う。新たに一から始めるのではなく、この3年間の経験を基にして、よりパワーアップさせて欲しいと願っている。

川口先生は今日もパソコンに向かう。進路指導主事として新たなプロジェクトを始動させるためにだ。

「学年主任のときも2年次のコース選択の意識付けとして日刊『進路指導ナビ』という進路情報誌を発刊し、そこである職業に就くためにはどの学部に進んだらよいか、どんな人が向いているのかなどをレクチャーしてきました。そこで、今後は実際に大学に行ってみたり、職場訪問するなどの経験を生徒にさせてあげたいのです。また、講演会など、生徒の視野を広げるようなものを企画していきたいと思っています」

3年間、系統立てて生徒を育てていくための新たな計画の実現に向けて、宇土高校の教師集団が動き始めている。



生徒の進路意識を高めるため、毎週ミニ新聞を発行したクラスもある。教師と生徒の連携を強化する取り組みも様々なアイデアで行われた。

析結果が1つの調査から何パターンも導き出される。また、校内誤答率の高い問題を見つけ、それについては必ず全クラスで授業中に解説するように徹底した。このような客観データによる裏付けは、さらに学年団の指導に一貫性を持たせていった。

### 生徒の指導

には保護者の協力も不可欠だ。学年団はこの点にも力を入れてきた。学期ごとの保護者会のほか、月1回「学年通信」を発行し、学年の現状、問題点などを包み隠さず保護者に公開して協力を求めた。自

### 松山南高校の取り組み

## 1 理系の担任会でスタート

97年度、3年生の学習状況に危機感を抱いた理系クラスの教師たちが毎週1回の担任会を始めた。タイムリーな音指導や、クラスを超えた個別指導など幅広く議論された。

# 毎週1回の担任会で タイムリーな指導を 検討する

## 2 文理合同から文理別の担任会へ

前年度の成果を受けて、98年度は文理合同で3年生の担任会が実施された。しかし、参加する教師の数が増えたことで会議全体の機動力が損なわれ、99年度からは文理別の実施とした。

3 クラスを超えて複数の目で指導  
クラス単位の指導だけでなく、文系全体、理系全体で生徒を指導しようという意識が高まった。また、教師間の指導の基準を統一し、豊富な共有情報を基にした面談も活発に行われるようになった。

## 愛媛県立 松山南高校

前身は明治24年創立の松山高等女学校。卒業生は3万人を超す。普通科と理数科を設置。99年度入試では、愛媛大の125名を筆頭に、315名の生徒が国公立大に合格した。また、高いレベルでの文武両道を目指し、3年次でも約8割の生徒が部活動に参加している。



## 3 年生の 5 月

理系の教室の廊下に、色とりどりの短冊をぶら下げた笹が並び、97年7月7日七夕の日、いつもとは違う風景に、通り掛かった1人の教師が「まるで幼稚園みたい！」と微笑む。短冊には各クラスの生徒たちの夢、目標が書かれている。その中に「クラス全員志望大合格!」と書かれたクラス担任の大きな短冊もあった。夏休み前の中だるみしがちなこの時期、天王山の夏休みに向けて生徒の気持ちを盛り上げようと、理系クラスの担任会の発案で行った七夕祭り。そこにあるのは、理系クラスの思いが集まった笹飾りだ。

1学期が始まった頃、進路課長で数学科担当の田中秀明先生には気掛かりなことがあった。「理系クラスの数学の力が落ちてきている……」授業を通しての不安は、模試の結果を見た瞬間に的中した。過年度比較、他校比較などの観点でも成績の低下が読み取れる。当然、クラス担任の間に危機感が広まった。当時、理系クラスの担任を務めていた今岡慎三先生は振り返る。「6月の学年会議でも話題に上りました。どうも今年の3年生は学習の取り掛かりが遅い。ただ、ではどうするかという具体的な方策までは議論できなかったんです」

年に5回しか開かれない学年会議では、生活指導や行事運営など様々な議題が山積みである。



進路や学習の話だけに時間を費やすことは現実的に不可能だ。だが、このままでよいのか？ そのうち生徒たちは挽回してくれるのだろうか？ 答えの出ないまま、学年会議は終わっていた。その年度、理系クラスの担任の中には受け持つ教師が3名いた。異動してきたばかりの森岡宏先生もその1人。「この学校のことはまだよく分からないけど、この危機的状態に対して3学年の教師が共同して、対策を練るべきでは」。森岡先生はそう考えた。異動してきたばかりの教師が、新しい試みを提案するのはそう簡単なことではないかも知れない。だ

生徒の状況をより把握した指導を行いたい。そんな思いから、松山南高校では毎週1回3学年の担任会が開かれ、それによってタイムリーな指導が行われた。



松山南高校進路課長  
田中秀明 Tanaka Hideaki

昭和26年香川県生まれ。数学科担当。同校は赴任8年目。進路課長を務めて3年目。「3年間に渡ってよりパランスよく生徒を指導する流れを考えていきたいです」



松山南高校進路課長  
今岡慎三 Imooka Shinzo

昭和27年愛媛県生まれ。物理科担当。同校は赴任5年目。「生徒の自主性を重んじながら、あまり手を掛け過ぎないように心がけています」



松山南高校進路課長  
森岡宏 Morooka Hiroshi

昭和31年愛媛県生まれ。数学科担当。同校は赴任3年目。「自分の持っている力を、生徒に気付かせるために、いろいろな指導を行いたいです」

が、自由に意見を言える雰囲気のあるこの学校の、この進路課ならきつと受け入れてくれるはず。森岡先生はそう確信していた。そして、進路課長の田中先生にこう相談した。

「3年生の理系クラスの担任で、生徒の実状を持ち寄り、それに対する指導法について毎週1回話し合っているんですけど、初めて本校で3年生を担当する先生が、今岡先生のように経験の豊富な先生から本校の実状や指導方針などを聞ければ、参考になると思うんです」

田中先生は「皆がこのままではいけないと感じていたのだ。口火は森岡先生が切ってくれた」

教師は、何を目標として動いたのか？

皆に呼び掛けよう」と思った。そして他の4名の担任に声を掛けていった。「今のままでダメです。変化を起すには何かきっかけを作らなければ。担任会をそのきっかけにしましょう。」  
こうして理系の担任たちが抱いていた不安の解決策を模索する場ができた。そして理系クラスの担任5名は、全員の授業の空き時間を利用して、毎週集まることになった。

## 七夕祭りは

この担任会で生まれた仕掛けの一つだ。運動部の

大会が終わって夏休みが始まる前に、生徒の意識を高めて、学習の計画を立てさせたい。そんな思いから短冊に各々の目標を書かせたのだ。  
担任会では、学年会議のように毎回の議題を事前にきつちりと決めておくことは少なかった。あくまで、そのときにそれぞれが気付いたことや抱えている疑問を持ち寄り、進路指導室の一角で話し始めるようにした。

「毎週1回の担任会の長所は、生徒の状況に応じたタイムリーな話題を取り上げられることです。目の前の具体的な課題に対して皆でアイデアを出し合い、すぐに対応できる機動力のある集まりですね(田中先生)」  
担任会では様々なテーマが話題になった。

わる生徒が増えた結果、県外の難関大に挑戦し、合格する生徒も増えた。

「この成果で、理系の担任たちは自信を深めた。これだけの成果を上げられたんだから、今度は文系も加えて3年生の担任全員で担任会をやりたい。」翌年も3年生を受け持つことになった森岡先生は田中先生にそう提案した。実は、文系の担任から学年主任にも同様の申し出がされていた。

確かに、担任会のメリットは証明された。ならば、後は担任全員が集まるための授業の空き時間を作るだけだ。放課後に実施しては面談や部活動など生徒に接する時

**理**系クラスの担任が、『進路の手引き』を活用した指導について話し合う。お互いにアイデアや疑問を出し合いながら、具体的な指導法を徐々に練り上げる。



「朝のSHRの話題についても皆で話し合いました。進路の意識付けをするのにはどんな話がよいだろうか(森岡先生)」

「もちろん個々の生徒の話も出ました。私のクラスのAさんは最近スランプのようだけれど、皆さんの授業での様子はどうですか、とか。自分とは違う目で見えた生徒の様子が分かると、今度はそれを基に面談を行つんです(今岡先生)」

夏休み前後に新たに学年集会を設けたり、推薦入試受験者を志望学部別に集め、教師が協力して面接の指導を行ったり、担任がよく知らない学部を志望する生徒には、その学部に詳しい別の担任が相談に乗るなど、担任会のアイデアは一斉指導から個別指導まで多岐に渡った。

「理系クラスの生徒全員を複数の目で見よう。そんな雰囲気でした。それまでは、同じ3年生でもクラスが違えば雰囲気も異なり、ひいては受験指導も異なってしまうことがあったかも知れませんが、同じような学力で同じ大学を目指しているのに、ある教師は大丈夫と考え、ある教師は難しいと考える。個々の担任の基準は同じとは限らないんです。でも、担任会を重ねてお互いの情報や経験を話し合つうちに、共通の基準での指導が可能になったんです(田中先生)」

間が犠牲になってしまつ。何とか教務課に時間を工夫してもらおう。

田中先生の要望に対して、水曜の3限目を担任全員空き時間にできる、と教務担当の教師は答えてくれた。こうして文理11クラスの担任に学年主任、進路課長の田中先生を加えた98年度の担任会がスタートした。

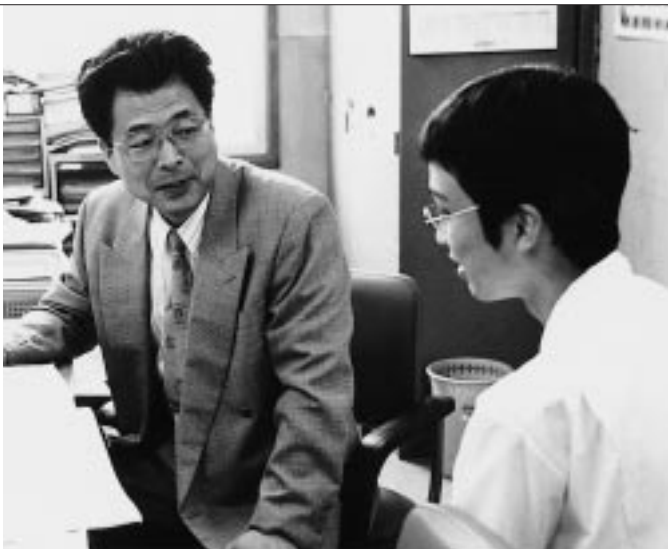
前年は5名だったが今度は13名、場所も進路指導室から会議室へと変更だ。参加者の数が増えたことで、新しいアイデアも生まれた。「最近遅刻する生徒が多いようだけれど、明日にでも10分間だけ学年集会を開いて注意してみてもどうだろう」「教育実習生がやってくるけれど、彼らに進路や学習について話してもらつ場を作つてはどうだろう」……。さらに、進路課は担任会のために模試の成績推移などの資料を用意し、タイムリーな議論ができるようにサポートした。そして2年目の担任会の年の入試では、国立大合格者数は近年最高の結果となったのだ。しかし……。

「会議に慣れてくると徐々に連絡会のような雰囲気になってしまったんです。その時期にふさわしい議題を出す先生も少なくなり、一言も話さずに終わってしまう先生も出てきました。5人程度なら雑談から始めることもできるし、一言も話さないわけにはいきませんが、どうも13人は多過ぎたよつです(田中先生)」

## そして

98年度の1学期のある日、会議室には理系クラスの担任が集まっていた。今年は文系と理系を分けて担任会を

アイデアや情報が増える。と、自ずと教師は面談などを通してそれを生徒にフィードバックする。担任会が始まって、松山南高校ではより個人面談が増えたという。



## 理系の

クラス担任が初めて担任会に取り組んだその年の入試、結果的には例年を上回る成果を3年生たちは上げた。

「教師は担任会で様々な情報やアイデアを得て、それを生徒にフィードバックします。教師が進路や学習面で生徒に頻りに働き掛ければ、生徒は『自分のことをこんなに真剣に考えてくれているのか』と心強く思つはずです。その結果、生徒たちは自分の目標に自信を持つてこたわれるようになったのでしょ(今岡先生)」

これまで松山南高校の生徒は地元国立大志向、現役志向が強かった。だが、自分の目標にこだ

実施することになったのだ。3年生は入試に向けて、日々新しい悩みや課題を抱えるもの。そんな3年生のための指導を考える会は、タイムリーな話題を自由に話せる場でなければならぬ。そこで、小人数の担任会に戻したのだ。3年続けて3年生を受け持つことになった森岡先生他4名の教師が、生徒に配る『進路の手引き』を活用した指導について話し合っている。

「今年は既に、小論文模試を新たに7月に実施すること、入試の現状に関する進路講演会を行うこと、オープンキャンパスへの参加をより勧めることなどで、他の先生方とのコンセンサスを得られました(森岡先生)」

ある若い教師は「生徒も入試もどんどん変わっていますよね。だから固定観念で指導してはダメだし、次々と新しい情報が必要なんです。また、一方で経験の豊かな先生の話を聞きたいんです」と語る。逆に森岡先生は「こちらは若い先生のいろんな疑問や気付きが刺激になってい」と言ふ。

「こんなときはどんな風に指導すればいいのだろう」といふとき、担任会で他の先生の話も聞いているうちにヒントを得ることがありますよね。よし、自分のクラスではこうしてみよう。って気が付くときが。そんなときは、教師だつて顔つきが変わるんですよ。独りで悩んでいると暗い顔になるけれど、皆で話しているとい顔になる。その顔を見ると、生徒だけでなく、僕らも少しずつ成長しているんだなあって感じるんです(森岡先生)」